

# 「子どもの食生活と躰についての総合的研究」(3)

A general research on the child development on eating habits and teaching manners (3)

「小鹿野町における母親を対象とした子どもの食生活と躰に関する事例調査」

川合 貞子(E, 2), 千田真規子(E, 1), 猪俣美智子(B, a), 上里千穂子(B, b), 斉藤 尚子(1, A1), 武石 仁美・  
福田 啓子(C, 1~9), 村木由紀子(D)

## 1. 調査の概要

### (1)調査の概要

目的：小鹿野町における「子どもの食生活と躰」の実態を一農村の事例として把握する。

対象地域：埼玉県秩父郡小鹿野町

対象者：小鹿野幼稚園・三田川幼稚園の4・5歳児の母親 219名

手続・方法：幼稚園を通して依頼し、園児の母親を対象に、質問紙によるアンケート調査

時期：昭和59年11月21日～11月30日

調査項目：

- A.基本的属性（年齢，就業状況，職場，学歴，家族構成，住居）
- B.食形態（食作法—食事場所，食卓，座席，食器，箸箱・箱膳の使用，食事時間・回数，所要時間，用意とあと片付け 食法—調理時間，献立，外食）
- C.子どもの食行動（食事内容・時間，準備やあと片付けの手伝い，食事の際の注意，好き嫌い，箸のもち方，躰の主体）
- D.食習慣（行事食とその意味・由来，神棚や仏壇，供物とその手伝い，食事にまつわる故事）

回収状況：小鹿野幼稚園  $\frac{143}{175} = 81.7\%$

三田川幼稚園  $\frac{76}{90} = 84.4\%$

計  $\frac{219}{265} = 82.6\%$

集計：質問項目毎の単純集計

### (2)対象地域の概況

調査対象として選択した小鹿野町の地勢，歴史的概容，人口・産業等の推移について，その特性を次に述べる。

#### ①地勢

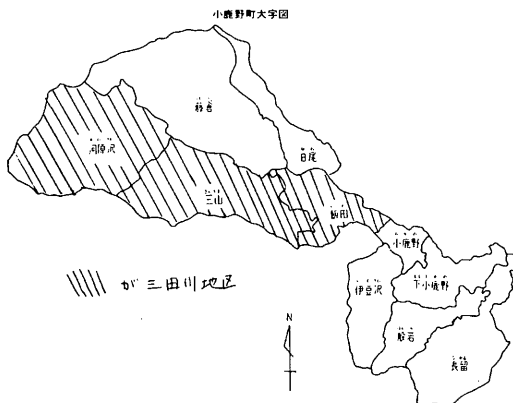
小鹿野町：

埼玉県西端部に位置し，秩父市街より国道299号線を北西に向かって約15km，南は荒川村と両神村，西は大滝村と群馬県上野村，北は吉田町，群馬県万場町・中里村に接している。標高は248m（町役場地点），東西に20kmと細長い地域で，総面積は100.02km<sup>2</sup>である。平地はわずか15%程度で，市街地や集落は荒川支流の赤平川がつくる段丘上の平地を中心にして形成されている。経営耕地面積は田—99ha，畑—213ha，桑園

—171ha, 果樹園その他—26haの計509ha (S55. 2. 1現在「農林業センサス」)。それ以外の約85%が山林原野となっている。昭和30年4月1日に旧小鹿野町と長若村が合併し, さらに翌31年3月31日に三田川村, 倉尾村が合併して現在の小鹿野町が成立した。

#### 三田川地区:

旧小鹿野町の北西端より, やはり国道299号線に沿って県の最西北端で群馬県境の志賀坂峠(標高876m)までの範囲に位置する。この地区のほぼ中央に流れる赤平川を縫うようにして国道がのびている。河原沢は北に二子山(標高1165.6m), 南に両神山(標高1723.5m)と高い山々に囲まれている。総面積は41.3km, うち経営耕地面積は田—17ha, 畑—59ha, 桑園—31ha, 果樹園その他—10haの計117ha (S55. 2. 1現在「同上」), 約95%が山林原野となっている。明治22年4月1日に飯田村, 三山村, 河原沢村が合併して三田川村となる。



#### ②歴史的概容

小鹿野町から出土する土器・石器は, 縄文中期(約4000年~5000年前)のものが多く, それよりも古いものが出ていないことから, 人間が住みはじめたのはこの頃からではないかとされている。もちろん当時の人口はわからない。ただし, 最も古い遺跡としては「飯田地区の観音山の岩陰には, 縄文草創期(約1万年前)の遺跡があるといわれている。」

古墳時代のものは, 小鹿野・下小鹿野地区に数多く存在する。丸山塚古墳(直径30m, 高さ5.1m)のように大きな古墳を築くためには, かなり多くの労働力を必要としたと推定される。古墳の近くには集落があり, かなり多くの人々が住んでいたものと推定される。

「知知父の国造(くにのみやつこ)が置かれたのは崇神天皇の時代であるから, この地方に大和文化の移入が行なわれたのは, 案外, 古くからであったかもしれない」とされている。

現在「巨香郷<sup>こかのごう</sup>」が小鹿野の古い地名と考えられているが, これは承平年間(931~937)に源順が編纂した『倭名類聚抄』に載せられている。

平将門に関する伝説が秩父地方には多いと言われるが, ここ小鹿野にもある。「勝負沢」の地名や, 斬殺された将門の妃・十二御前の霊を慰めるために里人が作ったという「十二御前神社」。「小鹿神社は天慶の乱(将門との戦い)に大功があり, 下野・武蔵両国の守となった藤原秀郷が, その氏神・春日の神を祭ったのであるとその縁起に記されてある。」

鎌倉・室町時代のすぐれた仏像も町内にはたくさん残っている。戦国時代の名残りとしては, 武田氏と北条氏の接点となったこの町に, 「軍平」, 「法師落人」という地名があり, 合戦のあったことをしのばせる。

江戸時代になると, 町全体が幕府の直轄地(天領)となった。享保2年(1717)には代官所が廃止され, 旗本の地行所となるが, 上小鹿野村だけは, 幕末に林肥後の所領となるまで御料所(天領)のままであった。

元禄二年正月(1689)「小鹿野寄場五人組人別帳」によれば、三田川地区には五人組が106組。約530戸、平均4人とすれば2120人と推定される。それ故当時は小鹿野地区よりも山間部である三田川地区の人口が多かったようである。

人口が記されている最古の文書は「般若村・村柄子明細書」(165)で190軒756人。岩田家文書「宗門人別帳」(1665)には、上小鹿野村290軒1162人と記されており、平均家族員数を計算してみると、それぞれ3.9人、4.0人になる。

元禄七年(1694)の「五人組帳」他(岩田家文書)から推定した町の人口は、1788戸7120人程度で、三田川地区では505戸2020人程度とさとされる。

上記の宗門人別帳の中で最大の世帯は「名主太郎左衛門の家族10人、下男23、下女8、山守り3の計44人」で、これは特例である。

『新編武蔵風土寄稿』(1810~1828編纂)には、当時の人々の生活の様子として、「農業の合い間に、男は薪炭、林産加工、女は養蚕、絹織りを生業としていた」と記されている。

江戸との交流もさかに行なわれた。小鹿野地区には、上・中・下の3宿があり六斎市も立った。現在も町内のあちらこちらの祭りで演じられている神楽・歌舞伎、春祭りに曳き回される屋台や笠鉦は、当時の繁栄ぶりを今日に伝えている。

### ③人口・世帯の推移

明治に入り、17年の「県町村合併史」による人口と戸数は、町全体で1717戸9043人、三田川地区については461戸2622人である。平均世帯員数を計算すると、町全体では5.0人だが、小鹿野地区では4.0人、三田川地区では5.7人と市街地よりも多くなる。元禄七年から明治17年までの185年間に旧三田川村を始め山間部の人口は、著しい増減をみせていないのである。

大正9年になって初めての国勢調査が行なわれ、それ以後の人口と世帯数については表のとおりである。総人口を見ると特別に大きな変動は見られない。更に細かく見ると終戦後のS25

●人口と世帯数 I-(2)-③ 表1

	世帯数	人 口			1世帯当り人口
		男	女	総 数	
大正 9年	2,499	6,430	6,585	13,015	5.2
14年	3,043	6,626	6,812	13,438	4.4
昭和 5年	2,603	6,726	6,872	13,598	5.2
10年	2,542	6,658	6,882	13,540	5.2
15年	2,462	6,459	6,680	13,139	5.3
22年	2,729	7,083	7,718	14,801	5.4
25年	2,706	7,265	7,770	15,035	5.6
30年	2,690	7,106	7,645	14,751	5.5
35年	2,757	6,671	7,321	13,992	5.1
40年	2,767	6,290	6,897	13,187	4.8
45年	2,890	6,056	6,582	12,638	4.3
50年	3,129	6,241	6,527	12,768	4.1
55年	3,338	6,322	6,451	12,773	3.8
56年	3,317	6,504	6,547	13,051	3.9
57年	3,336	6,503	6,588	13,091	3.9
58年	3,430	6,483	6,621	13,104	3.8

資料：国勢調査 各年10月1日現在「統計 おかの'84」より

●田町村別世帯数と人口の推移 I-(2)-③ 表2

地区	小鹿野		長若		三田川		倉尾	
	世帯	人口	世帯	人口	世帯	人口	世帯	人口
面積 ha	15.22		15.94		41.31		27.55	
昭和30年	1,237	6,380	382	2,218	658	3,734	413	2,419
35	1,343	6,323	375	2,040	632	3,375	407	2,254
40	1,403	6,277	360	1,859	604	3,007	400	2,044
45	1,523	6,367	356	1,692	623	2,743	391	1,836
50	1,680	6,641	351	1,586	720	2,911	378	1,630
55	1,893	6,905	345	1,515	738	2,870	362	1,483
56	1,842	7,019	348	1,543	752	2,946	375	1,543
57	1,852	7,093	353	1,553	754	2,935	377	1,510
58	1,968	7,208	347	1,560	738	2,877	377	1,459

資料：国勢調査 56. 57. 58年については住民登録人口「統計 おかの'84」より

年が15035人(平均5.6人)が最も多い。しかし「復員したすべての若者達の新規な職場」がなかった為、都市へ流出、農山村過疎化現象が起った。町では40年代入って工場誘致を始め、人口流出に歯止めをかけることに力を入れる。地区別にみても、長若・三田川・倉尾の山間部から小鹿野地区市街地集への集中化現象がうかがえる。

世帯数だけに注目すれば35年から少しずつ増えているが、人口は50年まで減り続けている。25年に5.6人だった平均世帯員数も55年には3.8

「子どもの食生活と躰についての総合的研究」(3)

●産業分類別15歳以上の就業者数

I-(2)-④ 表1

区 分	昭和35年			昭和40年			昭和45年			昭和50年			昭和55年			
	総数	男	女	総数	男	女	総数	男	女	総数	男	女	総数	男	女	
合 計	6,747	3,735	3,012	6,332	3,593	2,739	6,701	3,646	3,055	6,280	3,754	2,526	6,256	3,860	2,396	
第一次産業	農 業	3,753	1,804	1,949	3,164	1,625	1,539	2,539	1,190	1,349	1,610	835	775	1,142	618	524
	林業狩猟業	164	144	20	113	100	13	67	55	12	44	43	1	49	48	1
	漁業水産養殖業	1	1	0	2	2	0	2	1	1	2	2	0	1	1	0
	小 計	3,918	1,949	1,969	3,279	1,727	1,552	2,608	1,246	1,362	1,656	880	776	1,192	667	525
第二次産業	鉱 業	33	32	1	38	38	0	56	56	0	64	63	1	31	30	1
	建設業	356	317	39	375	356	19	520	492	28	729	680	49	864	795	69
	製造業	875	471	404	948	471	477	1,626	753	873	1,774	884	890	1,856	933	923
	小 計	1,264	820	444	1,361	865	496	2,202	1,301	901	2,567	1,627	940	2,751	1,758	993
第三次産業	卸売小売業	670	381	289	728	397	331	794	425	369	782	430	352	864	489	375
	金融保険不動産	15	9	6	31	13	18	37	18	19	70	35	35	77	40	37
	運輸通信業	128	111	17	160	129	31	189	162	27	233	221	12	275	260	15
	電気・ガス・水道業	6	6	0	16	14	2	11	10	1	8	7	1	30	28	2
	サービス業	617	348	269	639	354	285	719	378	341	806	433	373	884	474	410
	公務	127	110	17	115	92	23	140	106	34	152	118	34	179	142	37
	分類不能の産業	2	1	1	3	2	1	1	0	1	6	3	3	4	2	2
小 計	1,565	966	599	1,692	1,001	691	1,891	1,009	792	2,057	1,247	810	2,309	1,433	876	

資料：国勢調査 「統計 おかの'84」より

●事業所数

I-(2)-④ 表2

区 分	総 数		1人～4人		5人～9人		10人～19人		20人～29人		30人以上	
	事業所数	従業者数	事業所数	従業者数	事業所数	従業者数	事業所数	従業者数	事業所数	従業者数	事業所数	従業者数
38. 7. 1	534	2,312	426	796	57	365	29	366	11	275	11	510
41. 7. 1	572	3,043	443	877	66	436	33	390	11	258	19	1,080
44. 7. 1	571	3,303	441	847	74	475	(10人～29人)		35	507	21	1,474
47. 7. 1	590	3,626	435	855	88	565	38	510	12	306	17	1,390
50. 5. 15	599	3,832	442	919	85	554	44	582	10	250	18	1,527
53. 6. 15	645	4,158	466	955	108	695	39	523	14	331	18	1,654
56. 7. 1	708	4,402	519	1,117	109	712	47	643	13	317	20	1,613
A～C 農 林 水 産 業	1	20	—	—	—	—	—	—	1	20	—	—
D～L 非農林水産業	707	4,382	519	1,117	109	712	47	643	12	297	20	1,613
D 鉱 業	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
E 建 設 業	115	745	78	166	22	149	7	92	3	72	5	266
F 製 造 業	136	2,033	67	191	28	179	27	378	3	79	11	1,206
G 卸売業・小売業	295	967	246	506	39	252	6	85	2	51	2	73
H 金 融 保 険 業	4	76	1	2	—	—	1	19	2	55	—	—
I 不 動 産 業	3	5	3	5	—	—	—	—	—	—	—	—
J 運 輸 通 信 業	13	117	6	10	2	15	3	38	1	20	1	34
K 電 気 ・ ガ ス ・ 水 道 業	2	12	1	2	—	—	1	10	—	—	—	—
L サ ー ビ ス 業	139	427	117	235	18	117	2	21	1	20	1	34

資料：事業所統計調査 「統計 おかの'84」より

人となり、概ね核家族化してきたことが示されている。

55年から人口が非常にわずかず増え始めているが、核家族化していることに変化はない。

(S60. 2. 1 現在 13152人 3439世帯)

S43年10月に町民アンケートが行なわれ、その無作為抽出349人の回答を見ると「町に住んで何年」という質問に対し、(1)生まれた時から66.8%、(2)21年以上16.6%計83.4%あり、特に農山村部に定着性が強くみられたという。日本の総人口は、大正9年の時から2倍に増えた。都市によっては鉄道等の関係で何十倍にもふくれ上がった所もあるのに、小鹿野町はほとんど変わらない。特に三田川地区などの山間部では過疎化がみられるものの、元禄の時代からほぼ300年の長い間著しい増減はなかったといえる。

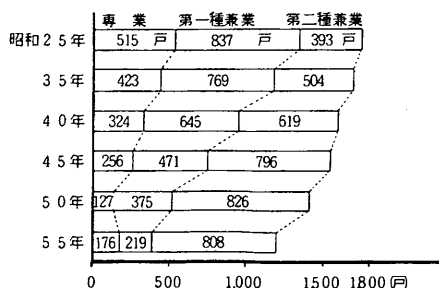
#### ④産業および農家戸数の推移

15歳以上の就業者数は、S35年から55年にかけて総数の著しい変化はないが、産業別になると大きく変わっている。第一次産業の就業者数が35年には第1位で約60%だったが、55年には約20%となり3位になってしまう。第二次・第三次産業が大きく伸び、特に第二次産業は35年に第3位20%弱だったが、45年には第三次産業をぬき、55年には約45%となって、小鹿野町就業者の第1位の職業となっている。

町内の事業所は年々数を増しているが、1～4人までの小規模の所が多い。産業別では「卸売業・小売業」が295(S56. 7. 1 現在)で1位となるが、従業者数からみると「製造業」が1位である。

#### ●農家戸数

I-(2)-④ 図1



小鹿野町の農家戸数はS25年で1745戸(総世帯数の47.1%)、35年になると1696戸と少し減るが割合は61.5%となる。その後徐々に減って、45年から50年にかけての5年間に約200戸、割合からみて約10%も減ってしまう。S55年現在で1203戸(36.0%)、農家人口は5681人(総人口の44.5%)である。

専業・兼業別に見ると上図のように、50年と55年との比較では、専業が127戸から176戸に増えてはいるものの、主な傾向として専業及び第一種兼業農家が年代とともに減少し、第二種兼業農家の割合が増えていることが顕著である。

以上のように小鹿野町の輪郭を辿ると、そこに依然農家としての地域的特性と並んで、特に三田川地区には協同体の伝統的性格が名残りをとどめていることがわかる。したがって当域は、本調査の目的にとって適格な必要条件を備えた対象地域と認められる。

参考・引用文献「小鹿野町誌」

「小鹿野町勢要覧・小鹿野'82」

「統計 おがの'84」

「小鹿野まち文化財」

## 2. 結果と考察

本論文以下の表について、実数は頻度(単位:人)を、( )内の数字は%を示す。

### A. 基本的属性

(1)対象者:219人

(2)性別:女性(園児の母親)

(3)平均年齢:33.2歳(父親-36.0歳)

(4)就業状況:

単位:人(%)

表A-1

就業者	非就業者	無 答	計
96 (43.8)	108 (49.3)	15 (6.8)	219 (99.9)

「子どもの食生活と躰についての総合的研究」(3)

表A-2 ○職場

自 宅	自宅外	無 答	計
19 (19.8)	71 (74.0)	6 (6.3)	96 (100.0)

表A-3 ○勤務状況

常 勤	パート	その他	無 答	計
37 (38.5)	42 (43.8)	9 (9.4)	8 (8.3)	96 (100.0)

表A-4 ○職業

農 業	専門・ 技術職	事務職	販売職	単 純 労働	サービ ス職	無 答	計
3 (3.1)	10 (10.4)	22 (22.9)	14 (14.6)	35 (36.5)	3 (3.1)	9 (9.4)	96 (100.0)

母親の就業は約44%で、表A-2のように自宅外への勤務が74%を占め、自宅の19.8%との間に大きな差が見られる。そのうちパートタイムは43.8%、常勤38.5%とほぼ同率を示している。職業別では「部品の組立・検査」等の単純労働が36.5%で最も多く、続いて事務職の22.9%となっている。農村地域であっても「仕事」として農業を行なっている母親は少ない。

(5)学歴：

表A-5

中学校	高 等 学 校	専 門 学 校	短 期 大 学	大 学	その他	無 答	計
74 (33.8)	85 (38.8)	17 (7.8)	12 (5.5)	3 (1.4)	4 (1.8)	24 (11.0)	219 (100.1)

対象の母親の学歴は、表A-5のように中・高卒が72.6%と高率を占めている。

(6)家族構成：

表A-6

核 家 族	複 合 家 族	無 答	計
91 (41.6)	107 (48.9)	21 (9.6)	219 (100.1)

表A-7 ○家族の人数

3人 以下	4 人	5 人	6 人	7 人	8 人	9 人	無 答	計
6 (2.7)	58 (26.5)	41 (18.7)	52 (23.7)	38 (17.4)	5 (2.3)	5 (2.3)	14 (6.4)	219 (100.0)

表A-8 ○子どもの人数

ひとり	2人	3人	4人	5人	無 答	計
11 (5.0)	107 (48.9)	65 (29.7)	14 (6.4)	7 (3.2)	15 (6.8)	219 (100.0)

核家族化が進んでいるとはいえ、この地域では複合家族が48.9%と半数を占めている。したがって5人以上の家族が64.4%と多く、4人以下の29.2%と比べて差がみられる。子どもの数は2人が48.9%と最も多く、続いて3人が29.7%となっている。

(7)住居：

表A-9

一戸建	マンション	団 地	その他	無 答	計
166 (75.8)	1 (0.5)	28 (12.8)	7 (3.2)	17 (7.8)	219 (100.1)

表A-10 ○部屋数(玄関・トイレ・浴室は除く)

2	3	4	5-6	7-8	9-10	11以上	無 答	計
23 (10.5)	13 (5.9)	20 (9.1)	61 (27.9)	55 (25.1)	18 (8.2)	6 (2.7)	23 (10.5)	219 (99.9)

住居は表A-9からわかるように、一戸建が75.8%と高率を示しており、集合住宅に住んでいる人は少ない。部屋数をみても5室以上が63.9%を占め、大きな一戸建の家に住んでいる割合が高いことを示している。

B. 食形態

(a). 食作法

1 <食事場所> - 「ふだん食事をする部屋が決まっていますか」

表B-1

決まっている	決まっていない	無 答	計
209 (94.9)	6 (2.7)	5 (2.3)	219 (99.9)

表B-2 決まっている場合の場所

勝手・台所					その他	無答	計
勝手	台所	食堂	キッチン	D・K			
24 (11.2)	18 (8.4)	18 (0.4)	2 (0.9)	10 (4.7)			
居間					その他	無答	計
居間	茶の間	リビング	座敷				
65 (30.4)	47 (23.0)	0 0	4 (1.9)	7 (3.3)	19 (8.7)	214 (100.1)	

〈食事場所〉については、まず「決まっていた」との回答が94.9%と圧倒的に多い。しかし、「決まっていた」場合、その場合については、「居間が一番多く、具体的には居間30.4%、茶の間22.0%、の順になっている。

2 〈食卓〉-「食卓は以下のどちらを使用ですか」

表B-3

	座卓	テーブル	その他	無答	計
朝	134 (61.2)	56 (25.6)	22 (10.0)	7 (3.2)	219 (100.0)
夕	127 (58.0)	43 (17.6)	36 (16.4)	13 (5.9)	219 (99.9)

その他：夏はテーブル、冬はこたつ。こたつの場合には座卓に入れる。

〈食卓〉については、朝・夕ともに座卓が半数以上を占めて多く、テーブル使用は、朝25.6%、夕19.6%である。

3 〈座卓〉-「食事の時、ご家族の皆さんの座席は決まっていますか」

表B-4

決まっている	決まっていない	無答	計
186 (84.9)	27 (12.3)	6 (2.7)	219 (99.9)

表B-5 〈座席の決まっただいたいの理由〉

	準備や片づけ便利	準備や片づけの手伝い	子どもの世話	話	上座を基準	に	なんとなく	テレビがよ	くみえる	その他	無答	計
父	2 (1.1)	0 0	14 (10.2)	32 (17.2)	70 (37.6)	26 (14.0)	8 (4.3)	29 (15.6)	186 (100.0)			
母	117 (62.9)	5 (2.7)	23 (12.4)	3 (1.6)	16 (8.6)	10 (5.4)	0 0	12 (6.5)	186 (100.1)			
祖父	5 (2.7)	0 0	2 (1.1)	21 (11.3)	29 (15.6)	10 (5.4)	0 0	119 (63.9)	186 (100.0)			
祖母	15 (8.1)	8 (4.3)	4 (2.2)	8 (4.3)	32 (17.2)	12 (6.5)	2 (1.1)	105 (56.5)	186 (100.2)			
子ども	36 (4.8)	24 (3.2)	15 (2.0)	2 (0.3)	156 (20.7)	60 (8.0)	14 (1.9)	446 (59.2)	753 (100.1)			

その他「食後に飲む薬が近くにある」、「子どもどうしだとけんかになる」、「子どもの順からここに座り、他へ移ると居ごちが悪い」、「背をサイドボードに寄りかからせて楽にできる」、父親の場合は、「人が動くのに、本人が動かなくてもよいように」、子どもの場合は、「長女が2才なので私(回答者)に近いところ」ということで気持ちが落ちつくから、「大人からみて面倒みやすい」、「私が嫁いできたときは決まっていた」、「テレビを見る時、正面だと座らないと見られないからその席で」、「ずっと座るから、食べる時も決まっている」、「いつも帰りがおそいので、その席しかあいていない」、「食事が一人で上手にできないため、おばあちゃんと一緒に」、「決まっていない」理由については、「あいているところに座る」、「主人がいろいろなところに座ってしまうから」、「お客様がよくきて一緒に食べたりするので」、「子どもたちが好きな場所に座ります」、「その時の気分で」、「家族が多いから、一緒に食べられないから」、「家族が多いから、一緒に食べられないから」、「自分で座ったところで食べる」、「朝は忙しいので一緒には食べない」、「自分の好きところに座る」、「子どもを優先に、好きところに座らせる」、「家族10人のため、台所が狭くて一緒に食べられない」、「食事の時間帯が違う」、「その場、その場で好きのところ」、「別に理由なし」、「夫婦で働いているため、子供の自由」、「イスが少ないから」、「子供が先に座り、あいたところに大人が座る」、「祖父母は決まっているが、他は変わる」、以上のように〈座卓〉については、「決まっ

「子どもの食生活と娯についての総合的研究」(3)

ていた]が84.7%とやはり圧倒的で、「決まっていない」が12.3%である。その理由をそれぞれみると、決まっていた場合の〈父親〉は、「なんとなく」が37.6%、「上座を基準に」が17.2%、「テレビがよくみえる」が14.3%となり、「子どもの世話」が10.2%、「その他」が4%、「準備や片づけに便利」が1.1%である。〈母親〉は、「準備や片づけに便利」が63%と大半を占め「子どもの世話」が12.4%、「なんとなく」が8.6%、「テレビがよくみえる」が5.4%、「準備や片づけの手伝い」が2.7%、「上座を基準に」が1.6%となっている。〈祖父〉については、「無答」が63.9%・半数以上を占めている、「なんとなく」が15.6%、「上座を基準に」が11.3%、「テレビがよく見える」が5.4%、「準備や片づけに便利」が2.7%、「子どもの世話」が1.1%である。〈祖母〉は、「無答」が56.5%、「なんとなく」が17.2%、「準備や片づけに便利」が8.1%、「テレビがよくみえる」が6.5%、「準備や片づけの手伝い」が4.3%、「子どもの世話」が2.2%、「その他」が1.1%、とそれぞれなっている。〈子ども〉については、「無答」が59.2%、「なんとなく」が20.7%、「テレビがよくみえる」が8.0%、「準備や片づけに便利」が4.8%、「準備や片づけの手伝い」が3.2%、「子どもの世話」が2.0%、「その他」が1.9%となっている。これらについて言えることは、伝統的な「イエ」制度の一端が少しくずれてきているように思える。「なんとなく」決まってというのが〈母親〉の場合をのぞいて、それぞれの家族が1位を占め、「上座を基準に」が2位に、「テレビがよく見える」が3位に席が決められているのである。〈食事場所〉が「勝手・台所」より、「居間」が多いということは、食事というのは、ただ単に食べて片づけるということではなしに、食事を楽しむということが、テレビが置いてある部屋に家族が一緒に集まって食事をする理由なのかもしれない。食文化の変化の一部のようにみられる。

4-〈食器〉-「ご家族にひとりひとりの食器(箸・お茶わん・おわん等)が決まっていますか」

表B-6

決まっている	決まっていない	決まっているものがないものがある	無答	計
192 (87.7)	22 (10.0)	2 (0.9)	3 (1.4)	219 (100.0)

決まっている理由

表B-7

大きさによって	衛生面を考慮して	お互いの存在を確認するため	習慣だから	その他	無答	計
60 (27.6)	24 (11.1)	67 (30.9)	57 (26.3)	6 (2.8)	3 (1.4)	217 (100.1)

〈決まっていなかった〉理由は、「別に理由がない」、「家業が民宿のため、家族用と分別しにくい」、「全員同種類のため」、「毎回きれいにするから変りない」、「同じものを使っているから」、「同じ茶わんや、おわんがたくさんもらっているので決まっているものもある」、「大人と子どもの違いだけ」、このように〈食器〉については、「決まっていた」が、87.7%、「決まっていなかった」が10.0%で、ほとんどの家庭は各自の食器は決まっていたことになる。しかし、その理由については、「お互いの存在を確認するため」が30.9%、「大きさによって」が27.6%、「習慣だから」が26.3%、「衛生面を考慮して」が11.1%、「その他」が2.8%でその内容は、「色や柄の好みで」、「習慣の要素もありますが、自分のものと、人の物との区別」、「長男、長女は大きさで」、「父母は色、柄の好みで」、「子どもは持ちやすいように小さめのものを、大人は自分の好みの色あい、形の物を選んだ」、「はしだけが決まっている」等のような点があげられた。



「子どもの食生活と蟻についての総合的研究」(3)

5 <箸箱>—「めいめいで自分の箸置を使っていますか」

表B-8

使っている	使っていない	無 答	計
32 (14.6)	180 (82.2)	7 (3.2)	219 (100.0)

この項目については、「使っていない」が82.2%、「使っている」が14.6%と使用していないほうが多く、これはおそらく箸立てなるものを使用し家族全員のものを一緒に立てておさめていたものと思われる。

6 <箱膳>—「あなたは箱膳を使ったことがありますか」

表B-9

使ったことがある	使ったことがない	無 答	計
32 (14.2)	178 (79.1)	15 (6.7)	225 (100.0)

使ったことがある場合の年代 (昭和)

表B-10

25-29	30-34	35-39	40-44	45-49	50-54	55-59	無 答	計
1 (3.1)	9 (28.1)	5 (15.6)	4 (12.5)	1 (3.1)	8 (25.0)	2 (6.3)	2 (6.3)	32 (100.0)

<場所>としては、埼玉60%、岩手6%、無答16%、京都、長野、加賀、宮崎、山梨、群馬が各3%であるように、過半数が埼玉県である。

<箱膳>については、「使ったことがない」が79.1%と圧倒的で「使ったことがある」が14.2%で<年代>は<30-40>の28.1%、<50-54>の25%と他よりわずかに多いだけで、他はバラつきが多くみられる。

7 <食事回数>—「毎日の食事は朝・昼・夕の3回ですか」

表B-11

は	い	いいえ	無 答	計
216 (98.6)	2 (0.9)	1 (0.45)	1 (0.45)	219 (99.95)

これについては、「朝・昼、夕の3回という回答がほとんどで98.6%、「3回以外」は0.9%である。食事というのは、3回というのがほとんどの家庭に定着していることがわかる。

8 <食事時間>—「食事の時間は何時頃ですか。またどのくらいの時間を必要としますか」

表B-12 <食事開始時刻>—(時：分)

	5:30	6:00	6:30	7:00	7:30	8:00	8:30	無 答	計
朝	0 0	3 (1.4)	21 (9.6)	133 (60.7)	42 (19.2)	11 (5.0)	1 (0.5)	8 (3.7)	219 (100.1)
夕	3 (1.4)	36 (16.4)	74 (33.8)	68 (31.1)	24 (11.0)	6 (2.7)	1 (0.5)	7 (3.2)	219 (100.1)

表B-13

<食事時間>—(分)

	10-15	15-30	30-60	60-	無 答	計
朝	85 (38.8)	124 (56.6)	5 (2.3)	2 (0.9)	3 (1.4)	219 (100.0)
夕	9 (4.1)	113 (51.6)	84 (38.4)	6 (2.7)	7 (3.2)	219 (100.0)

<食事開始時刻>については、<朝>は「7時が60.7%に半数以上で、<夕>は、<6時30-7時>に集中し、64.9%である。<食事時間>は<朝>は「15分-30分」が51.6%、「30分-60分」が38.4%と「15分-60分」の間の時間を要していることになる。やはり、<朝食>より<夕食>のほうが時間をかけて食事をしていることがわかる。

9 <食事状況>—「食事の際はたいていご家族が全員そろいますか」

表B-14

	は	い	いいえ	無 答	計
朝	130 (59.4)	84 (38.4)	5 (2.3)	5 (2.3)	219 (100.1)
夕	130 (59.4)	79 (36.1)	10 (4.6)	0 (0.0)	219 (100.1)

いいえの理由

表B-15 ~の係で

	主人の勤務	私の勤務	子どもの通学・通園	その他	無 答	計
朝	34 (40.5)	5 (6.0)	16 (19.0)	11 (3.1)	18 (21.4)	84 (100.0)
夕	40 (50.6)	2 (2.5)	2 (2.5)	7 (8.9)	8 (35.4)	79 (99.9)

表B-16 ~のことが多い

	主人が不在	私 が 不在	子どもだけ	その他	無 答	計
朝	41 (48.8)	2 (2.4)	7 (8.3)	9 (10.7)	25 (29.8)	84 (100.0)
夕	49 (62.0)	1 (1.3)	2 (2.5)	5 (6.3)	22 (27.8)	79 (99.9)

この項目については〈朝〉・〈夕〉ともに「全員そろっている」が目立ち59.4%となっている。「いいえ」の場合その理由には〈朝〉については、「主人の勤務」が40.5%で、「主人不在」が48.8%である。「その他」の内分けは、「祖父が仕事にでるので早い」と、私（回答者）の朝の用事との関係、「年寄りがでかける者と一緒に食べる」と落ついて食べられないというので、「主人と子どもが先に食べ、私と年寄りは後で食べる」、「子どもが小さいのでまだ寝ている」、「私と長女が一番目、主人が2番目、次に祖父母と次女で」、「親と子ども別々」、「おきる時間が違う」、「仕事が違う」、「祖父母不在」、「子どもだけ」等である。〈夕〉については、「主人の勤務」が50.6%で、「主人不在」が62.0%と〈朝〉と同じような結果が得られ、主人不在が、目立つようである。以上、〈食事回数〉、〈食事時間、状況〉を含めて、それら家業に従事する都度によって左右されつきたものと、概況される。すなわち、それには協同体を基盤とする生活様式の規定性がうかがわれるのである。

10 〈食事の用意とあとかたづけ〉－「食事の用意とあと片づけについての役割」

表B-17

	私の役割	主人の役割	祖父母の分担	その他	無 答	計
川意	198 (90.4)	0 (0)	6 (2.7)	14 (6.4)	1 (0.5)	219 (100.0)
後かたづけ	177 (80.8)	0 (0)	5 (2.3)	12 (5.5)	25 (11.4)	219 (100.0)

ここでは、〈用意〉、〈後かたづけ〉共に「私の役割」が90.4%、80.8%と圧倒的に多く、次にわずかに「祖父母の分担」が2.7%、2.3%であって、「主人の役割」は0%である。以上の各項目

について概観してきたが、それによって食作法について認められる傾向は、伝統的な「イエ」秩序や居住形態が少しずつくずれつつあるようにみうけられ、これは生活様式の変化の一面とも思われる。

B. 食法

11. 〈調理時間〉－「夕食の調理時間はおよそどのくらいかかりますか」

表B-18

～30分	30～60分	1時間～1時間半	1時間半～2時間	2時間～	無 答	計
9 (4.1)	123 (56.2)	79 (36.1)	2 (0.9)	0	6 (2.7)	219 (100.0)

〈夕食の調理時間〉は「30～60分」かかったとの回答が52.2%と過半数以上を占め、次いで「1時間～1時間半」が36.1%とかなりの数を占めた。反面、「1時間半～2時間」かかったとの回答は0.9%と少なく、「2時間～」に関しては0%であった。調理時間が短いことについては利便な食品を多く利用する傾向にあること。また、主婦の有職者が増えるにつれて合理的調理の実践がなされているものと考えられよう。

12. 〈献立〉－「献立は以下のどの点を優先的に考慮されますか」

表B-19

	1位	2位	3位	4位	5位	無 答	計
栄養のバランス	68 (31.1)	61 (27.9)	29 (13.2)	21 (9.6)	9 (4.1)	31 (14.2)	219 (100.0)
経済面	39 (17.8)	43 (19.6)	68 (31.1)	41 (18.7)	0	28 (12.8)	219 (100.0)
調理方の簡便さ	15 (6.9)	23 (10.5)	45 (20.5)	98 (44.7)	1 (0.5)	37 (16.9)	219 (100.0)
家族の好み	59 (26.9)	57 (26.0)	56 (25.6)	22 (10.1)	4 (1.8)	21 (9.6)	219 (100.0)
その他	0	0	0	1 (0.5)	3 (1.4)	215 (98.2)	219 (100.1)

「家族の好みで誰を優先させますか」

夫の好み	子ども	祖父母	自分	その他	無 答	計
56 (25.6)	89 (40.6)	11 (5.0)	10 (4.6)	11 (5.0)	42 (19.2)	219 (100.0)

〈献立〉を考えるうえで最も考慮されるものとしては「栄養のバランス」の31.1%があげられ、また2番目に考慮される事柄としては、「家

「子どもの食生活と躰についての総合的研究」(3)

族の好み」の26.9%があがり、同じく3番目は「経済性」、4番目には「調理の簡便さ」が考慮されているという結果を得た。通常献立を立てる際には、単に「栄養のバランス」のみを考慮しながら献立を考えるということではなく「家族の好み」ないし経済等も考慮しながら考えられたのであろうと推測することができる。

家族の好みで優先されるのはやはり「子ども」の40.6%が最も多く、次いで「夫の好み」が25.6%となっており、「自分」や「祖父母」の好みは5%前後と低い値であった。献立を考える際に、主婦が自分の好みを押さえても子供の好みを優先させるのは親の子どもに対する対応の甘さの一端が示唆されたかもしれない。

13. <調理>-「あなたは好んで調理なさるほうですか」

表B-20

だいすき	すきなほう	どちらともいえない	あまりすきではない	きらい	無 答	計
8 (3.7)	87 (39.7)	97 (44.3)	23 (10.5)	1 (0.5)	3 (1.4)	219 (100.0)

<調理> することについては「どちらともいえない」が44.3%と最も多く、次に「すきなほう」が39.7%と続き、「あまりすきではない」については10.5%であった。調理することに「どちらともいえない」との回答が多かったことは、調理ばなれの傾向を示したものであるとも推測される。しかし、調理が「すきなほう」と答えた人が40%近くあった事は、この地方の人々の手作り志向がまだまだあることがわかり興味深い結果である。

14. <外食>-「ご家族で外食をされますか」

表B-21

することが多い	時々する	あまりしない	全くしない	無 答	計
4 (1.8)	115 (52.5)	80 (36.5)	15 (6.9)	5 (2.3)	219 (100.0)

「外食をすることが多い・時々する」理由

主婦の調理からの解放	家族の気分転換	主人の補給が速い	おいしいものを食べる	その他	無 答	計
30 (25.2)	73 (61.3)	3 (2.5)	23 (19.3)	6 (5.0)	3 (2.5)	138 (115.8)

★複数回答

「外食をあまりしない・全くしない」理由

主人が自宅で食べたがる	子どもがさわいで他人に迷惑	食費を節約するため	その他	無 答	計
25 (26.3)	12 (12.6)	34 (35.8)	23 (24.2)	9 (9.5)	103 (108.4)

★複数回答

外食については、「時々する」が52.5%で半数以上を占めている。反面、「全くしない」と「あまりしない」双方を加えると43.4%になり約4割が外食をほとんどしないことになる。

外食をする理由として高い値を占めたものとしては、「家族の気分転換」が52.9%と多く次いで「主婦の調理からの解放」が21.7%等となり、「その他」としては「子どもが外食をしたがる」などがあげられた。外食をほとんどしない理由としては、「食費を節約するため」が33.0%と多く、ついで「主人が自宅で食べたがるから」が24.3%となり、「その他」として「祖母が外出を好まない。共働きなので日曜日ぐらいは家族全員そろって家で食事をとるため」などがあつた。しかし、前述の結果が示す通り外食産業が発達した現在、外食をする機会は増々、増えるであろうと推測される。

15. <既製食品>-「既製の弁当・惣菜・冷凍・インスタント食品などをどう思われますか」

表B-22

よく使う	時々使う	あまり使わない	全く使わない	無 答	計
27 (12.3)	144 (65.8)	45 (20.5)	1 (0.5)	2 (0.9)	219 (100.0)

「既製食品をよく使う・時々使う」理由

便利だから	安いから	おいしいから	別の味を取り入れたい	その他	無 答	計
138 (80.7)	4 (2.3)	10 (5.8)	18 (10.5)	8 (4.7)	2 (1.2)	180 (105.2)

★複数回答

「既製食品をあまり使わない・全く使わない」

「子どもの食生活と糞についての総合的研究」(3)

理由

使いたくない	栄養価が低い	食品添加物に不安	心がこもらないから	その他	無 答	計
4 (8.7)	2 (4.3)	14 (30.4)	20 (43.5)	8 (17.4)	9 (19.6)	51 (123.9)

★複数回答

〈既製食品〉については、「時々使う」が65.8%と圧倒的に多く「よく使う」の12.3%を含めると8割近くの家庭で使われている。しかし「あまり使わない」も20.5%あったことを指摘しておかねばならない。〈既製食品〉を使う理由として、「便利だから」が76.7%と最も多く、他の「おいしいから」などの理由は10%以下であった。

〈既製食品〉を使わない理由として「心がこもらない」の39.2%、「食品添加物に不安がある」の27.5%などがあげられた。既製食品は今やあらゆる場所で簡単に購入することができ、その便利さゆえ「時々使う」が多いのは納得できる結果である。しかし、反面であまり使わない理由に「心がこもらない」という精神面の回答が多かった。この根拠には、単に〈既製食品〉が便利でオールマイティーの力を持つものではないという食品の一面性を表わしている。

16. 〈健康食品〉- 「最近流行の自然・健康食品については、どう思われますか」

表B-23

愛好している	時々試す	ほとんど用いない	全く用いない	無 答	計
14 (6.4)	54 (24.7)	104 (47.5)	41 (18.7)	6 (2.7)	219 (100.0)

「健康食品を愛好している」理由

健康維持に効果がある	添加物の心配がない	周囲で普及しているから	その他	無 答	計
24 (31.5)	35 (46.1)	12 (15.8)	0	5 (6.6)	76 (100.0)

★複数回答

「健康食品を用いない」理由

効果があると思えない	おいしくないようなので	食費が高くて	その他	無 答	計
64 (44.1)	19 (13.1)	15 (10.3)	17 (11.7)	30 (20.7)	145 (99.9)

★複数回答

この項目については「全く用いない」と「ほとんど用いない」これら双方を加えると66.2%となり6割以上の方が用いないという結果と

なった。また、「時々ためす」理由のうち上位を占めたものとしては「添加物の心配がない」が46.1%、「健康維持に効果がある」の31.5%等があげられる。健康食品を用いない理由としては「効果があると思えない」の45.7%が主な回答であった。健康食品ブームにもかかわらず用いないものが6割以上を占める理由は、各種の要因が考えられるが日常的に自然な食品を入手しやすいこの地域の特色もその理由の一点としてあげることができるであろう。

17. 〈食材料〉- 「穀類や野菜・果物などお宅でとれるものがありましたら多少にかかわらず種類・場所を記入して下さい」

表B-24

穀 類	野菜類・いも類・豆類				果物類・その他
とうもろこし 36 (16.4)	葱 105 (47.9)	にんじん 42 (19.2)	野菜はほとんど 15 (6.8)	生姜 7 (3.2)	柿 59 (21.9)
米 30 (13.7)	大根 96 (43.8)	きつまいも 41 (18.7)	さやえんどう 14 (6.4)	オクラ 6 (2.7)	栗 27 (12.3)
小麦 11 (5.0)	じゃがいも 92 (42.0)	玉葱 34 (15.5)	しゃくしな 12 (5.5)	かぶ 6 (2.7)	いちご 14 (6.4)
大豆 4 (1.8)	なす 83 (37.9)	かぼちゃ 30 (13.7)	レタス 10 (4.6)	こまつ菜 5 (2.3)	ぶどう 12 (5.5)
きび 4 (1.8)	きゅうり 78 (35.6)	ごぼう 29 (13.2)	春菊 10 (4.6)	みつば 5 (2.3)	桃 9 (4.1)
そば 2 (0.9)	ほうれん草 78 (35.6)	小豆 28 (12.8)	アスパラガス 9 (4.1)	みょうが 5 (2.3)	梅 8 (3.7)
	白菜 72 (32.9)	キャベツ 26 (11.9)	カリフラワー 8 (3.7)	しそ 4 (1.8)	とうがらし 6 (2.7)
	トマト 67 (30.6)	さといも 25 (11.4)	ブロッコリー 8 (3.7)	にんじん 4 (1.8)	なし 5 (2.3)
	いんげん 59 (21.9)	ニラ 28 (10.5)	プチトマト 8 (3.7)	枝豆 3 (1.4)	あんず 3 (1.4)
	ピーマン 47 (21.5)	大豆 19 (8.7)	パセリ 8 (3.7)	フキ 3 (1.4)	すもも 3 (1.4)

★複数回答

表B-25 食材料栽培場所

自分の庭	菜園	耕地	その他	無答	計
37 (16.9)	8 (3.7)	114 (52.1)	7 (3.2)	53 (24.2)	219 (100.1)

前報告のごとく、畑作物中心の地域のため米、その他の穀類を栽培する家庭は少ないが、野菜に関しては葱、大根、じゃがいも等が40%以上の家庭で栽培されており、野菜はほとんど作っているところも6.8%あった。この中にはプチトマト、アスパラガスなど西洋野菜の栽培を行っている家庭もみられ、そこからはこの地域の豊かな食材料の一端が伺える。さらに、果物類に関しては、地形がら柿、栗なども多く作られている。栽培場所としては耕地が52.1%と多く、自分の庭については16.9%となり簡単に野菜などができる環境にあることがうかがえる。

18. <食内容>-「お子さんの一日の食事内容ないし献立を教えてください」

表B-26

	朝食	昼食	夕食
ごはん・(みそ汁)・副菜に2品	90 (41.1)	14 (6.4)	12 (5.5)
ごはん・(みそ汁)・主菜の肉類のみ	17 (7.8)	33 (15.1)	6 (2.7)
ごはん・(みそ汁)・主菜の魚類のみ	17 (7.8)	14 (6.4)	8 (3.7)
ごはん・(みそ汁)・肉類・野菜類	7 (3.2)	36 (16.4)	26 (11.9)
ごはん・(みそ汁)・魚類・野菜類	10 (4.6)	14 (6.4)	25 (11.4)
パン・(牛乳又はスープ)・副菜1~2品	17 (7.8)	14 (6.4)	1 (0.5)
パン・(スープ)・肉類のみ	2 (0.9)	1 (0.5)	0
パン・(スープ)・魚類のみ	1 (0.5)	0	0
パン・(スープ)・肉類・野菜類	2 (0.9)	4 (1.8)	0
パン・(スープ)・魚類・野菜類	0	0	0
麺類	0	1 (0.5)	31 (14.2)
麺類・副菜1~2品	0	3 (1.4)	12 (5.5)
その他	32 (14.6)	52 (23.7)	74 (33.0)
無答	24 (11.0)	33 (15.1)	24 (11.0)
計	219 (100.2)	219 (100.1)	219 (100.2)

上記の食事内容で朝食については圧倒的に「ごはん・みそ汁・つけもの」等のパターンが41.1%と多く、朝食のごはん党は6割以上でありパン党は1割程度であった。主菜については肉類・魚類のみが16.9%となり、野菜と共に食しているについては8.7%と低い値を示し朝食の野菜不足が伺えた。また、その他としては牛乳・果物のみや穀類をとらず副菜のみを食している子どももいた。昼食に関しては、ほとんどお弁当であるがここでもごはん党が50.7%と多く、主菜については魚類より肉類を食した人が多く前者の3倍であった。夕食については、「その他」がかなりの数を占めており、献立例をあげるとカレーライスが9.6%と多く、うどんとチャーハンとか鍋物などがあげられる。さらに夕食で注目すべきことは麺類の14.2%で特にうどんが多く食されていた。

全体的にはごはん党であり、食志向の保守的な一面がうかがえる。しかし、主菜に肉類を食している家庭が多く、これらは子どもの嗜好を示すものであり現代の食生活における傾向と一致する結果となった。

以上食法について多少の推論も交えながら概括してみると、自然的資源や産物にめぐまれているという一面は確かにあるがその他の食材料・調理等の諸点においてはもはや一般的家庭との差異は全く消滅したといっても過言ではなかろう。そういった中から食事の全国的均一化がもたらされ、そうした傾向は今後ますますその流れを早めていくものと考えられる。

C. 食行動

1. お子さんが食事に要する時間はだいたいどの位でしょうか。

表C-1

	10~15	15~30	30~60	1時間	無答	計
朝食F %	92 (42.0)	118 (53.9)	5 (2.3)	2 (0.9)	3 (1.4)	219
夕食F %	26 (11.8)	139 (63.5)	43 (19.6)	2 (0.9)	9 (4.0)	219

朝食では、「15～30」(53.9%)が半数以上を占め、次いで「10～15分」(42.0%)である。夕食でも朝食同様、「15～30分」(63.5%)とするものが最も多いが、2番目に「30～60分」とするものが19.6%みられ、「10～15分」(11.8%)が朝食より少なく、朝食より時間をかけていることがわかる。これは、夕食の時に子どもの一日の行動を話し合うなど、家族の会話などをしながら食事がされていることもうかがわれるが、食事のメニューとの関わりなども考えられるのではないだろうか。

2. 食事の用意やあと片づけについて、お子さんに手伝わせませうか。

(1) 用意について

表C-2

食器を並べる	もりつけ	ほとんどさせなかった	全くさせなかった	その他	無 答	計
111 (50.7)	16 (7.3)	72 (32.9)	12 (5.5)	0	8 (3.7)	21 (100.0)

(2) あと片づけについて

表C-3

自分の食器だけ運ばせる	他の食器を運ばせた	食器を洗わせた	食器棚にしまった	ほとんどさせなかった	全くさせなかった	その他	無 答	計
83 (37.9)	45 (20.5)	6 (2.7)	1 (0.5)	60 (27.4)	5 (2.3)	15 (6.8)	4 (1.8)	219 (100.0)

食事の用意については、約50%が「食器を並べる程度で、約38%は、「ほとんど」あるいは「全くさせない」である。

あと片づけでは、自分の食器、あるいは他の食器を運ばせるものが約60%弱で、ほとんどあるいは全くさせないは約30%となっている。用意に比較し、あと片づけの方がわずかではあるが、食事の手伝いをさせている。しかし、いずれも手伝いをさせていないものが30～40%と高く、食事に関する手伝いを幼児にさせていない親の多いことがわかる。

3 食事のしつけについて、特に留意する事柄を以下からお選び下さい。

表C-4

A	B	C	D	E	F	G	無.	合計
76 (34.7)	96 (43.8)	115 (52.5)	128 (58.4)	153 (69.9)	60 (27.4)	10 (4.6)	5 (2.3)	643 (293.6)

複数回答

- A. 朝食の前に顔を洗わせる
- B. 朝食の前に着がえさせる
- C. 手を洗わせる
- D. 毎食後に歯をみがかせる
- E. あいさつ(「いただきます、ごちそうさま」等の唱和やお祈り)をさせる
- F. 家族全員そろってから食べさせる
- G. その他

表C-5

あいさつをさせるわけ

a	b	c	d	無	合計
126 (82.3)	23 (15.0)	3 (2.0)	4 (2.6)	41 (26.8)	197 (128.8)

複数回答

- a. 習慣として
- b. 両親や作物・食物をつくってくれた人達に感謝するため
- c. 神・仏に感謝するため
- d. その他

しつけについて最も多かったのは、「あいさつをさせる」(69.9%)である。そのわけをみると「習慣として」(82.3%)が大部分を占め、「両親や作物、食物をつくってくれた人に感謝」(15.0%)、「神、仏に感謝」はわずか2%にすぎない。すなわち、あいさつを重視するといっても、何かに感謝するという明確な意識を持って行なうというより、ただ漠然とひとつの習慣として行なわれているようである。

2番目にしつけとして留意されていることは「歯をみがかせる」(58.4%)となり、「手を洗わせる」(52.5%)、「朝食の前に着がえさせる」(43.8%)、「朝食の前に顔を洗わせる」(34.7%)と続いている。また「家族そろってから食べさ

「子どもの食生活と躰についての総合的研究」(3)

せる」(27.3%)は、決して多くはないが、父親の仕事上の理由も含め、子どもを中心に食事が行なわれていることもうかがわれる。

4. 食事中お子さんに特に留意する事柄について○をつけて下さい。

表C-6

ひじをついて食べない	姿勢正しく座わる	寝ころばない	立ち歩かない	大きな声で話をしない
102 (46.6)	108 (49.3)	88 (40.2)	82 (37.4)	26 (11.9)

キョロキョロわき見をしない	クチャクチャとかむ音をたてない	迷い箸をしない	箸をごはんに立てない	こぼさない
26 (11.9)	48 (21.9)	23 (10.5)	83 (37.9)	84 (38.4)

残さない	好き嫌いを言わない	その他	無 答	合 計
102 (46.6)	124 (56.6)	9 (4.1)	4 (1.8)	909 (415.1)

全体的にみると「ひじをついて食べない」(46.6%)、「正しく座わる」(49.3%)などの食事時の態度や姿勢、さらに「好き嫌いを言わない」(56.6%)、「残さない」(46.6%)の食べ物を大切にするといった2点が重視されている。また、「箸をごはんに立てない」(37.9%)の古くからの迷信なども比較的多くみられるが食生活の昔から変わらぬ伝承的意義が重視されているということであろう。

5. 食事の際、次のような場合にはお子さんにどのように注意なさいますか

(1) 床や畳にこぼしたら

表C-7

食べさせる	ひろわせる	注意をする	その他	無 答	計
4 (1.8)	120 (54.8)	77 (35.2)	9 (4.1)	9 (4.1)	219

(2) 食卓の上でこぼしたら

表C-8

食べさせる	ひろわせる	注意をする	その他	無 答	計
66 (30.1)	67 (30.6)	56 (25.6)	5 (2.3)	25 (11.4)	219

(3) 口のまわりや衣服につけたとき

表C-9

食べさせる	ひろわせる	注意をする	その他	無 答	計
32 (14.6)	62 (28.3)	89 (40.6)	6 (2.7)	30 (13.7)	219

☆「ひろわせる」については、「ふかせる」「食べさせる」も含む、食べさせたかどうかは不明

(4) 食べ残した時

表C-10

食べさせる	無理には食べさせない	注意をする食べたかは不明	その他	無 答	計
43 (19.6)	33 (15.1)	96 (43.8)	18 (8.2)	29 (13.2)	219 (100.0)

(5) 好物が出されてその量が少ないと不満を言った時

表C-11

あげる	あげない	注意する納得させる	その他	無 答	計
20 (9.1)	48 (21.9)	102 (46.6)	15 (6.8)	34 (15.5)	219 (100.0)

(1)においては、「ひろわせる」(54.8%)が半数以上を占め、次に「注意する」(35.2%)となる。「食べさせる」はわずか1.8%だけである。それに対し(2)では、「食べさせる」(30.1%)、「ひろわせる」(30.6%)、「注意する」(25.6%)とほぼ同じ割合となっているのが特徴である。しかし、(3)では、「注意する」(40.6%)が最も多くなり、次に「ひろわせる」(28.3%)、「食べさせる」は(1)ほどではないが14.6%と少なくなっている。いずれにせよ「食べさせる」ことが少ないのは衛生面を考えてのことばかりではなく、現代の食料の豊富さも反映しているといえるであろうし、また「注意する」ということばによるしつけも現代の特徴のひとつといえよう。

(4)では、「注意する」(43.8%)が最も多く次に「食べさせる」(19.6%)、「無理には食べさせない」(15.1%)となる。(5)では、やはり「注意する」(46.6%)が半数近くを占め、「あげない」(21.9%)、「あげる」(9.1%)となる。これらのことは、(1)、(2)、(3)と同様、子どもに対して何らかの注意や説明をすることによって納得さ

「子どもの食生活と嫉についての総合的研究」(3)

せることを重視し、無理におしつけたり、行動させることは少ないことがわかる。

6. お子さんは食べ物に好き嫌いがありますか。

表C-12

ある	ない	無答	計
134 (61.2)	76 (34.7)	9 (4.1)	219 (100.0)

表C-13

(1) 嫌いな食べ物

野菜	生野菜	ピーマン	ネギ	トマト	にんじん	きのこ類	しいたけ
30	0	47	13	8	9	7	7
なす	きゅうり	玉葱	いんげん	肉	レバー	さしみ	卵
3	2	4	0	4	1	1	3
牛乳	納豆	あんこ	つげもの	魚	かぼちゃ	無答	計
0	5	1	0	0	0	0	155

複数回答

表C-14

(2) 嫌いな食べ特がある場合、あなたはどのように対応しておられますか。

偏食しないように調理を工夫した	「身体に良いから」などと注意した	「一口でも必ず食べさせた」	「しいて食べさせない」	その他	無答	計
50 (26.1)	81 (43.1)	29 (15.4)	18 (9.6)	9 (4.8)	1 (0.5)	188 (140.3)

複数回答

好き嫌いについては、「ある」(61.2%)、「ない」(34.7%)となる。嫌いな食べ特では野菜類に偏り、特にピーマンが多い。これらの対応策としては、「身体によいからなどと注意をした」(43.1%)、「調理の工夫」(26.6%)、「一口でも食べさせた」(15.4%)、「しいて食べさせない」(9.6%)となっている。子どもに嫌いな食べ物があっても、注意するあるいは親が調理の工夫をするなど、直接子どもに無理強いしたり、子どもが努力することよりも、親の努力に重点が置かれている。

7 箸の持ち方については

表C-15

親を見習わせる	手をとって教える	言葉で説明する	注意しない	その他	無答	計
49 (22.4)	101 (46.1)	56 (25.6)	11 (5.0)	12 (5.5)	5 (2.3)	234 (106.2)

複数回数

ここでは、「手をとって教える」(46.1%)が最も多く、「言葉で説明する」(25.6%)、「親を見習わせる」(22.4%)、「注意しない」(5.0%)となり、見よう見まねというより、具体的に、手を取り、ことばで意図的に教えている様子が見えがえる。

8 食事中テレビをつけておられますか。

表C-16

はい	いいえ	無答	計
108 (49.3)	106 (48.4)	4 (1.8)	219 (100.0)

表C-17

いいえの理由

家族の会話が失われる	子どもが食事に集中できない	子どもの食事に対する感謝の気持ちがうする	その他	無答	計
18 (17.1)	90 (84.9)	1 (0.9)	7 (6.6)	3 (2.8)	119 (112.3)

複数回答

食事中テレビをつけているのとつけていない数はほぼ同数であり、つけない理由としては、「食事に集中できない」(84.9%)が非常に多い。先にも述べたように、「食事中は静かに、きちんとして食べる」ということより、楽しく会話をしたり時間をかけてとるということが一般的になってきているが、テレビをみながら食事をする家庭が増えていることもその原因のひとつであろう。

表C-18

(1) その程度

きびしい方である	かなり心がけている	どちらともいえない	あまりしない方である	全くしないでもない	無答	計
8 (3.7)	116 (53.0)	74 (33.8)	20 (9.1)	0	1 (0.5)	219 (100.0)



表C-19

(2) 食事のしつけの主は

主人	私	父	母	その他	無答	計
24 (11.0)	160 (73.1)	2 (0.9)	13 (5.9)	17 (7.8)	3 (1.4)	219 (100)

(1)では、「かなり心がけている」(53.0%)、「きびしい方である」(3.7%)と半数以上が子どものしつけについて積極的な姿勢を示している。しつけの主については、私、つまり母親が73.1%と最も多く、幼児の食事のしつけがほとんど母親にまかされていることがわかる。その他においては、母親(私)と祖母(母)、母親(私)と父親(主人)などが多くみられた。

以上、子どもの食行動について、その結果を

表D-1

	必ず作る	時々作る	どちらとも言えない	ほとんど作らない	全く作らない	無答	計
お正月	186 (84.9)	13 (5.9)	7 (3.2)	7 (3.2)	1 (0.5)	5 (2.3)	219 (100.0)
ひなまつり	82 (37.5)	52 (23.7)	22 (10.0)	35 (16.0)	14 (6.4)	14 (6.4)	219 (100.0)
お彼岸	94 (42.9)	49 (22.4)	18 (8.2)	23 (10.5)	25 (11.4)	10 (4.6)	219 (100.0)
子どもの日	71 (32.4)	73 (33.3)	28 (12.8)	26 (11.9)	8 (3.7)	13 (5.9)	219 (100.0)
お盆	115 (52.5)	32 (14.6)	16 (7.3)	28 (12.8)	16 (7.3)	12 (5.5)	219 (100.0)
十五夜	69 (31.5)	44 (20.1)	27 (12.3)	38 (17.4)	27 (12.3)	14 (6.4)	219 (100.0)
クリスマス	127 (58.0)	41 (18.7)	21 (9.6)	16 (7.3)	3 (1.4)	11 (5.0)	219 (100.0)
七五三	67 (30.6)	26 (11.9)	40 (18.3)	40 (18.3)	19 (8.7)	27 (12.2)	219 (100.0)
誕生日	151 (68.9)	45 (20.5)	8 (3.7)	5 (2.3)	2 (0.9)	8 (3.7)	219 (100.0)
その他	まつり12 十三夜2	恵比寿講6 命日4	天神様1 結婚記念日3				

まず「お正月」については、「必ず作る」が84.9%と圧倒的比率である。これは「お正月」が今日でもなお日本の代表的な行事として定着していることを示している。

「ひなまつり」については、「必ず作る」が37.5%で伝統行事にもかかわらず比率が低い。反対に「全く作らない」「ほとんど作らない」は全体の約20%を越えており、更に任意にあげたこれ

中心に述べてきた。

要約すると、戦前戦後に比べて食量も豊富になり、食事のしつけについても「食べることの大切さ」から衛生面や栄養面を考慮したものへと変化してきた。しつけの程度では、かなり積極的な態度がみられるが、子どもに対して、ことばで説明するあるいは、注意するというところに重点がおかれ、強制はあまりしていない様子がかがわれた。

D、食習慣

1. 〈行事食〉—「(年中)行事の日には、特別に食事を作ってあげますか」

〈表D-1〉

ら行事の中での順位も六番目にあたる。従って「時々作る」23.7%を加えた61.2%の家庭で何らかの行事食が作られているものの、年間では行事として特に重視されてはいないことがわかる。

「お彼岸」については、年2回の春、秋の行事を包括するが、「必ず作る」が42.9%で「時々作る」の22.4%を加えると約60%強に相当する。

しかしこれも年中行事の中では先の〈ひなまつり〉とほぼ比肩しており、行事食として特に重きが置かれてはいない。

更に〈子どもの日〉についても「必ず作る」が32.4%とその比率は低い。しかし「時々作る」が33.3%で他の行事の中でも最も高く、加えて〈子どもの日〉が国民の祝日として制定されてから未だ年月が浅いこと等を考慮すれば、〈子どもの日〉が行事として次第に定着しつつあるものと受け取られる。

〈お盆〉については、「必ず作る」が52.5%と過半数を占めており、同じ仏事・仏参である〈お彼岸〉を凌いでいる。これはやはり日本の伝統的行事の一つとして生活の中に根づいている表われと言える。

しかし〈十五夜〉については、「必ず作る」が31.5%と低く、「時々作る」20.1%を加えてようやく50%に及ぶ程度である。〈十五夜〉が元来収穫儀礼の一つであることを考えれば、農村地域でのこの結果は予想外であった。

〈クリスマス〉については、「必ず作る」が58.0%とかなり高い比率を示しており、年中行事の中でも三番目に位置している。これは戦後の欧米化や商業主義の煽りによって盛大化したものと考えられる。

〈七五三〉については、「必ず作る」が30.6%と低く、「時々作る」11.9%を加えても半数に満たない。反対に「全く作らない」「ほとんど作らない」は全体の約三割を占めており、日本古来の行事としては行事食を作る度合いが低い。しかし、これについては〈七五三〉が特定の祝日として制定されていないことを考慮すべきであろう。

〈誕生日〉については、「必ず作る」が68.9%で〈お正月〉について群を抜いている。これは〈クリスマス〉同様、欧米化の影響が大であること、更に著しい商業主義化によるものと考えられる。

最後に〈その他〉として、祭り、恵比寿様、天神様、十三夜、命日、結婚記念日等があげら

れているが、命日と結婚記念日を除けば、いずれも土俗・民間信仰を基盤とする行事と言える。また更にこの表から、行事食を作る度合いの順位として、1〈お正月〉、2〈誕生日〉、3〈クリスマス〉、4〈お盆〉となっており、日本古来の伝統的行事である〈七五三〉〈十五夜〉〈ひなまつり〉〈お彼岸〉等々はいささか低調気味である。そしてこれらの現象は、前述の通り、欧米化や商業主義と深くかかわりあっており、〈行事食〉は日本の伝統文化と外来化の混淆において伝承されていると言えよう。

2. 〈行事食の意味・いわれ〉—「行事食の意味ないしいわれについて、お子さんに話してあげますか」

表D-2

たいてい話す	ほとんど話さない	無答	計
107 (48.9)	84 (38.4)	28 (12.7)	219 (100.0)

しかし以上のように、子どもに「たいてい話す」のは48.9%で全体の約半数には相当するものの、「ほとんど話さない」の38.4%を幾分か上回っているにすぎない。この点から今日のような情報化社会の中では、家庭以外から得る情報も多いので、今後急激に伝承されなくなることはないであろうが、将来「たいてい話す」と「ほとんど話さない」の関係が同等、更には逆転する可能性も充分に考えられる。つまり〈行事食の意味・いわれ〉については伝承されにくくなっていると言えよう。

3. 〈仏壇・神棚・祠〉—「お宅には仏壇や神棚・祠がございますか」

表D-3

神棚+ 仏壇+ $\alpha$	神棚 +仏壇	神棚	仏壇	その他	無答	計
22 (10.0)	91 (41.6)	50 (22.8)	13 (5.9)	3 (1.4)	40 (18.3)	219 (100.0)

〈欄外〉+ $\alpha$  およびその他としてあるもの  
 恵比寿12.大黒4.荒神3.祠8.井戸神2.氏神5.お経  
 様1.紙の位碑1.大神宮2.釜神1.道祖神1.墓1.八  
 幡様1.稲荷4.おおべし1.布袋1.火防の神2.観音様  
 1.産婆様1.お正月様1

まず上の表の見方について、〈神棚+仏壇+ $\alpha$ 〉は神棚と仏壇とそれ以外に祀るものがある場合、〈神棚+仏壇〉は神棚と仏壇の2つを祀っている場合、同様に〈神棚〉は神棚のみ、〈仏壇〉は仏壇のみ、〈その他〉は以上に属さないものを祀っている場合である。更に欄外は、〈 $\alpha$ 〉及び上表の〈その他〉の内訳を明記したものである。

さてこの表を数値の高いものから見ると〈神棚+仏壇〉が41.6%で群を抜いており、次いで〈神棚〉-22.8%、〈神棚+仏壇+ $\alpha$ 〉-10.0%、〈仏壇〉-5.9%、〈その他〉-1.4%の順になっている。また同時にこれを〈神棚〉と〈仏壇〉で比べると、全体の74.4%が〈神棚〉を、57.5%が〈仏壇〉を祀っていることになる。以上のことから〈無答〉を除く81.7%の家庭では、神棚、仏壇の部分または全部を祀っていることがわかる。更に〈欄外〉に祀られているものの種類は表のように大変多いが、これらはいずれも土俗・民間信仰に集約されている。

3.-2)-「(ある場合) ごはんや水等、毎日お供えなさいますか」

表D-4 (1)で記入されている場合のみ

毎日供える	毎日供え行事食等も供える	行事食や旬のものを時々供える	ほとんど供えない	供えることはまずない	無答	計
109 (60.9)	10 (5.6)	42 (23.5)	11 (6.1)	0 (0)	7 (3.9)	179 (100.0)

供える理由

a. 家の習慣で	47 (29.2)
b. 先祖や故人となった身内を偲んで	42 (26.1)
c. 神や仏への感謝と家の幸福を願って	79 (49.1)
d. その他	1 (0.6)
無答	13 (8.1)
計	182(113.1)

複数回答

まずこの表の見方について、任意に用意した回答項目はA-〈毎日供える〉、B-〈行事食や旬のもの、または特別に調理した場合など、時々供える〉、C-〈ほとんど供えない〉、D-〈供えることはまずない〉の4項目だが、集計時A及びBという複数回答があったので、これを予

想される行動として考え、新たに〈A+B〉の回答項目を設けたものである。

上の表から、祀るものがある家の9割が何らかの供えものをしており、そのうち7割近くが毎日供えていることがわかる。更に〈供える理由〉としては、〈神や仏への感謝や家の幸福を願って〉が49.1%で最も多く、〈家の習慣〉-29.2%を除けば、神仏や祖先への感謝や畏敬の念が窺える。従って〈ほとんど供えない〉-6.1%を別にすれば、供えものをするものは人々の厚い信仰心の表われとして解釈することができる。

3.-3)-「(同様にある場合) お子さんにも供えさせますか」

表D-5 (1)で記入されている場合のみ

供えさせる	供えさせない	無答	計
105 (58.6)	37 (20.7)	20.7 (20.7)	179 (100.0)

また子どもについては「供えさせる」が58.6%で「供えさせない」20.7%の約3倍に相当する。これは前項目から充分予想されるべき結果であり、子どもたちにも厚い信仰心が受け継がれていることがわかる。

4. 〈ことわざ〉-「食事のことわざについて」

まず表の見方について、初めにa~nは一般的な食事にまつわる故事を任意に用意したものである。◎は「子どもに話したことのあるもの」すなわち既に「伝承したもの」であり、○は「(自身に) 既知のもの」で「子どもに話さなかった」を含意して「伝承しなかったもの」となる。またしかし◎は「子どもに話したことがある」以上「既知」を前提としているわけであるから、従って◎+○は既に「伝承されていたもの」となる。更に/は「知らなかったもの」であるだけに「伝承されていなかったもの」として受け取ることができる。

表D-6

◎お子さんに話したことのあるもの

○御存知のもの

／御存知ないもの

	◎+○	◎	○	／	計
a. ご飯を食べながら背伸びをすると、ご飯が腹に入らず背中の方に入って死ぬ	10 (7.5)	4 (3.0)	6 (4.5)	123 (92.5)	133 (100.0)
b. 肘をついてご飯を食べると地震がくる	5 (3.8)	2 (1.5)	3 (2.3)	128 (96.2)	133 (100.0)
c. 寝ころんでものを食べたり、食べてすぐ横になると、牛になる	129 (97.0)	108 (81.2)	21 (15.8)	4 (3.0)	133 (100.0)
d. 一杓子で茶碗一杯のご飯を盛るな	40 (30.1)	6 (4.5)	34 (25.6)	93 (69.9)	133 (100.0)
e. 左手でご飯を盛るな	17 (12.8)	3 (2.3)	14 (10.5)	116 (87.2)	133 (100.0)
f. こぼした飯粒は必ず拾え、さもないと眼がつぶれる	28 (21.1)	7 (5.3)	21 (15.8)	105 (78.9)	133 (100.0)
g. 朝食に汁をかけて食うと出世しない	48 (36.1)	12 (9.0)	36 (27.1)	85 (63.9)	133 (100.0)
h. お赤飯に汁をかけて食うと、結婚式や葬式の日に雨(雷)が降る	64 (48.1)	9 (6.7)	55 (41.4)	69 (51.9)	133 (100.0)
i. 正月の七草粥と15日の小豆粥を吹いて食ってはいけない。田植えの時大雨が吹く	19 (14.3)	4 (3.0)	15 (11.3)	114 (85.7)	133 (100.0)
j. 箸から箸で食べ物を受け渡するな	117 (89.0)	89 (66.9)	28 (21.1)	16 (12.0)	133 (100.0)
k. 風呂の中でものを食うと親の死に目に会えない	6 (4.6)	3 (2.3)	3 (2.3)	127 (95.4)	133 (100.0)
l. 食器を箸でたたくと蛇が入ってくる	48 (36.1)	14 (10.5)	34 (25.6)	85 (63.9)	133 (100.0)
m. 食器の口の欠けたものを食膳に出すと客が不幸になる、女はお産が重くなる	10 (7.5)	2 (1.5)	8 (6.0)	123 (92.5)	133 (100.0)
n. 食事中、立って座席をあちこち移動すると、嫁入り先が決まらない、嫁に行つて腰がすわらない	35 (26.3)	8 (6.0)	27 (20.3)	98 (73.7)	133 (100.0)
o. その他 ○朝食に汁をかけて食うとケガをする。 ○食器をたたくとオオカミがくる(こじきがる)					

そこで各項目についてその特長を概括すると、先ず◎+○はC-97.0%が圧倒的で、次いでj-89.0%、以下半数に満たないもののh-48.1%、gとlが同数36.1%、という具合に続いている。そして◎+○に対する◎の比率を見た場合、これは時間的経過の中で「伝承されていたもの」を「伝承した」つまり「伝承されたもの」の内容と度合を示すものであるが、C-「外面的態度の矯正」が97.0%：81.2%と目立ち、次いでj-「宗教的禁忌」89.0%：66.9%、h-「社会化への導入」48.1%：6.7%となる。また○については全体的に数値は低いが、その中ではh-41.4%、g-27.1%、d・l-25.6%、

j-21.1%、n-20.3%の順で数値が高い。更に◎+○に対する○の比率を見ると、これは「伝承されていた」にもかかわらず「伝承しなかったもの」すなわち「伝承されなかったもの」の内容と度合を示すものであるが、h-48.1%：41.4%が最も高く、次いでg-36.1%：27.1%、l-36.1%：25.6%、d-30.1%：25.6%となる。これによればh・g-「社会化への導入」、l・d-「宗教的禁忌」の順になり、C-「外面的態度の矯正」は97.0%：15.8%で最も比率が低いこととなる。従つて以上のことから「伝承されたもの」と「伝承されなかったもの」とは相反しており、同時に互いを裏付けあっている

ことが理解できよう。

以上の集計結果から農村地域の食習慣で着目すべきことは、著しい商業主義化と近代文化の導入によって、日本古来の伝統的行事がそれらと複雑に混合されながらも残存していることであろう。つまり〈行事食〉については、お正月やお盆、お彼岸などの伝統行事の中にクリスマスや誕生日などの外来文化が組みこまれ、それらが根強く定着していることでわかる。しかしまた〈行事食の意味・いわれ〉については次第に伝承されにくくなっていることも見逃せない点である。また〈故事〉については「外面的態度の矯正」に重点が置かれ、「宗教的禁忌」や「社会化への導入」は後退している。そしてこうした現象は食文化の伝統的意義の衰退を示すものである。

## E. 総括

1. 家庭における食生活は、その家庭の〈食〉に対する考え方、生活形態の一つの現れと見なすことができる。

食することは、本来、健康な身体を維持、増進させるために欠かすことのできない大きな柱の一つといえる。これは単に栄養素が満たされているというだけではなく、心のかよった食物をおいしく食べることが、子どもたちの成長に欠かすことのできない大切な食の要素である。自然との関わりあいのなかで人間の食物が生産され、季節のおりなす変化が食物の味わいを深めてくれる。

当地域は、耕地を有している家も50%以上あり、また庭先などでも日常使用する穀物、野菜類等を栽培しているので温室ものとは違う食材料を得ることができる。居住形態も「一戸建て」の家屋が多く、自然環境、住環境も都市よりは恵まれている。しかし、母親が家庭外に仕事を持ち、テレビのCMなどの影響をうけ、加工食品がとり入れられ、電子レンジなどの電化製品が普及し、伝統的な食文化を有していた地域にも都市化の波がおしよせて〈食形態〉も格一化

されてきている。

全社協保母会の調査によると、農業の兼業地域では、夕食の準備のための時間を30～60分かけている家庭が61.3%、60分以上が20.2%となっているが、当地域では、60分以上が36.1%とやや多く、調理の好きな母親が40%近くにもなったことと考えあわせると、一般よりは調理に手を加えているといえよう。国民栄養調査によると、60分以上の家庭では栄養摂取量は充足しているが、それ以下の家庭では不足しがちであるといわれている。

時間を比較的ゆっくりと持つことができる夕食の〈食卓〉は、今日一日をふり返って話しあうとともに、家族の健康を確認する〈場〉でもある。夕食に全員そろわない家庭が36%あるが、ちょっと時間をずらせば、一緒に食べられるのと思う場合が少なくない。家族と一緒に食べることにより、料理や食品の種類に巾ができ、栄養のバランスも得られ、〈食文化〉も伝えられるのである。

2. 乳児は生理的な空腹を訴えて泣き、親（養育者）は泣き声に應えて授乳する。その行為のくり返しを通して大人のことがげや仕草、暖かさを体験し、空腹を満たすという生理的満足と共に、人との触れ合いの中で情緒的安定を得て精神的、身体的成長が促進される。乳幼児期の食事は空腹を満し、精神的満足を得る楽しい場であることが大切であり、そのためには、社会的な約束事（マナー）や、発達に応じて自らも食卓を豊かにする創造的な役割を担うことを学ぶことも必要となる。食するという行為を通して、家族の一員として、さらに社会の一員としての行動様式を子どもは獲得してゆくのであり、そこにいわゆる「しつけ」のあり方が問われるのである。

食行動に関して、当地域では主に母親が積極的にしつけに取り組んでいる様子がうかがわれる。内容は、衛生・栄養的側面が重視され、説得の方法がとられることが多く、習慣としての

食前後の挨拶は行なわれるが、感謝の気持を養う意味では積極的には為されていない等の特長がみられる。食習慣においても神仏に対する感謝は大人側には伝承されているが、行事食およびその意味の伝承は薄れる傾向にある。行事食は、それを作り、食べる事で伝統的意味を知り、親子のコミュニケーションがはかられ、子どもの精神的豊かさを養う一役を担うはずである。それ故、もう一度行事食の本来の意味を考える必要があるように思われる。

誤

正

P. 7	表B-2	食堂18 (0. 4)	—————→	18 (8. 4)
P. 7	右側	上から20行目		
		「家族が多いから、一緒に 食べられないから」	—————→	削除する
P. 9	左側	上から一行目		
		箸置	—————→	箸箱
P. 10	左側	上から6行目		
		B	—————→	(b)
P. 18	右側	上から10行目		
		外来化	—————→	外来文化
P. 27	表A-3	常務	—————→	常勤
P. 27	表A-4	その他	—————→	無答
P. 31	左側	表B-19以下4行目		
		B	—————→	(b)
P. 50	右側	上から20行目		
		<祖母>	—————→	<子ども>
P. 53	左側	上から10行目		
		B	—————→	(b)
P. 62	表D-6	㊦の㊦+0		
		65 (15. 3)	—————→	19 (15. 3)
研究報告	第9集、別冊を通して	「複合家族」	—————→	「拡大家族」